

【原著論文】

オクシモロンに関する一考察
関連性理論の観点から*

井門 亮

言語コミュニケーション研究室

A Relevance-theoretic Account of Oxymoron

Ryo IDO

Language and Communication

Abstract

Oxymoron is a figure of speech which combines two contradictory or incongruous words in encoded meaning, such as ‘a true lie,’ *Isogaba maware* (More haste, less speed.), and *Chiisana kyojin* (Little big man). Such expressions are semantically incompatible, but the hearer can interpret what the speaker intends to communicate. In this paper, we will be concerned with oxymoron based on the Relevance Theory developed by Sperber and Wilson (1986/1995²), and explain how the inferential processes of recovering the explicit content of the utterance, such as ad hoc concepts construction and saturation contribute to the interpretation of this figure of speech.

キーワード：オクシモロン，関連性理論，アドホック概念構築，飽和

1. はじめに

オクシモロン (oxymoron) とは、「小さな巨人」や「公然の秘密」といった矛盾関係や反義関係にある語を結合した修辞表現である。矛盾関係にある語が結びつけられているため、オクシモロンを言語的な意味で捉えると当然矛盾が生じることになるが、聞き手はそこから話し手の意図した意味を自然と解釈することができるのである。本論文ではそういったオクシモロンの解釈プロセスについて、関連性理論で提案されているアドホック概念構築、飽和といった明意復元のための推論作業に焦点を当てて検討していく。

* 本研究は JSPS 科研費 JP18K00638 の助成を受けたものである。

2. オクシモロンとは

はじめに本論文の分析対象であるオクシモロンの性質について概観し、そこから浮かび上がってくる疑問点を整理しておきたい。オクシモロンとは、例えば「小さな巨人」や「公然の秘密」といったような矛盾関係や反義関係にある語を結合した修辞表現である。¹このオクシモロンという用語の語源は、ギリシャ語の「常軌を逸したこと」(mōros) による「面白い洞察」(oxys) にあり (佐々木・他 (2006: 473)), 「対義結合」, 「撞着語法」, 「矛盾語法」などと呼ばれることもある。

- (1) a. OXYMORON: The yoking together of two expressions which are semantically incompatible, so that in combination they can have no conceivable literal reference to reality: ‘my male grandmother’; ‘a true lie’; ‘a philatelist who doesn’t collect stamps’. (Leech 1969: 132)
- b. 正反対の意味が直接結合されて、なおかつ矛盾に陥ることなく、第三の意味が融合生成される。対義結合ともいう。 (瀬戸 1997: 58)

これらの定義にあるように、オクシモロンでは矛盾関係や反義関係にある語が結びつけられるが、語の結合の仕方には、品詞の観点から次の4つのタイプがあるとされる。

- (2) a. 名詞に形容詞がかぶさったもの (例: 真面目な冗談, 賢い道化, 残酷なやさしさ)
- b. 動詞を中心とした慣用的なもの (例: 急がば回れ, ゆっくり急げ, 負けるが勝ち)
- c. 形容詞どうしの結合 (例: 遠くて近い, 広くて狭い, 甘辛い)
- d. 名詞の連鎖 (例: 是非, 不即不離, 慇懃無礼) (瀬戸 1988: 48-49)

どのような品詞の語が結びつけられたとしても、それらが矛盾関係や反義関係にあることから、オクシモロンを文字通りに解釈すれば当然矛盾が生じることになる。しかし (2) で挙げた例からも明らかなように、実際の解釈では矛盾をきたすことなく、(1b) で瀬戸 (1997) が言うような「第三の意味」を自然と理解することができるのである。そういったオクシモロンの解釈プロセスは、(3) で佐藤 (1987) が述べているように「不思議と言えば不思議である」かもしれない。

- (3) 互いに相容れぬ意味を結び合せれば、少なくともことばの表面上は、まったく無意味な文になるはずである。...それにもかかわらず、私たちはしばしばそういう形式の逆説をいとも容易に理解

¹ オクシモロンは「逆説法」との関係性も指摘されている。野内 (2002: 105) は、逆説法は「一見世の通念には反するように思われるけれども、指摘されてみると目から鱗が落ちるような真実をつく表現」であり、「語と語という小さな単位ではなく、文を越える大きな単位が問題になる」ところにオクシモロンとの違いがあると述べる。その一方で Leech (1969: 132) が、オクシモロンと逆説法は“‘absurdities’ which convey self-conflicting information” という点において共通すると述べていることから、大森 (1994) や森 (2002) など両者の区別をしない立場からの研究もあり、本論でもそれにならってオクシモロンと逆説法の区別はしないこととする。

してしまう。不思議と言えば不思議である。 (佐藤 1987: 222)

それではオクシモロンが伝達する「第三の意味」とはどのような性質のもので、なぜ私たちはその意味を「いとも容易に理解してしまう」のだろうか。この疑問について佐藤 (1987: 227-228) は、論理的にはナンセンスであるオクシモロンがきわめて有効な表現を成立させるのは、「言語においては《語》の意味が弾力をもつ」ためであるとし、語の意味するものが「その都度自動的に伸縮し、適切に焦点を結ぶからである」と述べている。そしてそういった語の意味の伸縮性を「意味の弾性」と呼んでいる。この点については以下の通り野内 (2005) にも同様の記述があるが、意味の伸縮性が解釈の際に具体的にどのように機能するのは明らかにされていない。

- (4) 言葉というものは普段むすびつかないものでも強引に並べてみると何となくそれらしき意味を帯びてくるから面白い。例えば「冷たさ」と「情熱」は常識的には矛盾する観念である。しかし「冷たい情熱」という言い方はある条件下では立派に通用する。小柄でも立派な活躍をした野球選手や力士について「小さな大投手」とか「小さな大力士」とか呼ぶことは実際におこなわれる。言葉の意味は驚くほど伸縮自在で可塑性がある。 (野内 2005: 293-294)

こういった伸縮性を持つ一方で、上の (2b) の例からも明らかなように、オクシモロンには「急がば回れ」や「負けるが勝ち」など成句としてすでに慣用化 (定着) しているものも多い。Arii (1990) はそのようなオクシモロンを特に“dead oxymoron”と呼んでいる。

- (5) The attraction of oxymoron, though some of oxymoronic phrases have become hackneyed and lost their original vitality—these oxymorons may properly be called ‘dead oxymoron’—lies in the fact that they denote apparently irreconcilable opposites and yet convey something. (Arii 1990: 634)

あるオクシモロンが成句として定着しているならば、そこで用いられた語や句全体の意味も固定されているのではないだろうか。そうすると dead oxymoron の解釈についても、佐藤 (1987) や野内 (2005) が言うような語の意味の弾性・伸縮性という観点から捉えることができるのかという疑問が生じる。もし説明できないのであれば、どのようなプロセスを経て dead oxymoron は解釈されるのだろうか。

ここまでオクシモロンとはどういった表現なのか、レトリック研究での記述を中心に概観してきたが、そこから生じた疑問は以下の4点にまとめられる。

- (6) a. オクシモロンが容易に理解される解釈プロセスとはどのようなものだろうか。
 b. オクシモロンが伝える意味（「第三の意味」）とはどのような性質のものだろうか。
 c. オクシモロンで用いられた語の「意味の弾性」は解釈の際にどのように機能するのだろうか。

d. すでに慣用化している *dead oxymoron* の解釈はどのように説明できるのだろうか。

本稿ではこれらの中でも特に (6a-c) を中心に関連性理論の観点から検討を行い、その結果を踏まえて (6d) については稿を改めたい。それでは本研究の理論的基盤となる関連性理論の概要を確認しつつ、(6a) の疑問から考えていくことにしよう。

3. 関連性理論²

3.1. 関連性の原理と解釈の手順

Sperber and Wilson (1986/1995²) によって提案された関連性理論 (Relevance Theory) は、不確定な情報しか記号化していない発話から、どのように聞き手が話し手の意図した意味を推論しているのか、その推論過程の解明を目指した理論である。この理論での「関連性」という概念は、認知効果 (cognitive effect) と処理コスト (processing effort) によって定義される。認知効果とは、ある発話が聞き手の認知環境を改善することによって得られるもので、その発話が聞き手の ① 既存の想定を強化する場合、② 既存の想定と矛盾し誤った想定を放棄させる場合、③ 既存の想定と結びつき新たな結論であるコンテクスト的含意 (contextual implication) を導き出す場合に生じる。そしてある発話が認知効果を生む場合、その発話はそのコンテクストにおいて関連性があり、「認知効果が大きければ大きいほど関連性は高い」と定義される。しかしそういった認知効果は無償で得られるわけではなく、発話を処理するためにはいくらかの心的な労力を要する。そういった情報を処理する際に必要となる労力を処理コストと呼び、処理する発話の言語的・論理的な複雑さや、解釈に用いるコンテクストを呼び起こす容易さなどが影響する。そして「処理コストが小さければ小さいほど関連性は高い」と規定される。

認知効果と処理コストの観点から関連性理論では、不十分な情報しか記号化していない発話から、聞き手は関連性を求めて話し手の意図した意味を推論すると考えている。ただしその際に聞き手が期待できるのは、「発話は聞き手がそれを処理するコストに見合うだけの関連性を持っている」、「発話は話し手の能力と選択が許す範囲内で最も高い関連性を持っている」という最適な関連性の見込みである。この見込みに基づき、発話解釈を支える原理として (7) の関連性の伝達原理 (Communicative Principle of Relevance) が提案されている (Sperber and Wilson 1995: 260)。

(7) すべての発話は、それ自身の最適な関連性を見込みを伝達する。

この原理が明らかにしているのは、発話をするということはそれ自体、聞き手にとって認知効果のある情報が、解釈のために不必要な処理コストを払うことなしに得られますよ、と言っていることにほかならないということである (今井 2015: 62)。そういった保証があるので、聞き手は発話解釈の際

² 本章での関連性理論の説明は、井門 (2017, forthcoming) に基づく。

に少ない処理コストで注意を払うのに値する関連性を求めて推論を始め、そして費やした処理コストに見合う関連性が得られたところで解釈をストップし、その解釈が話し手の意図したものだ判断するのである。このことから話し手の意図した意味を見つけるために聞き手がたどる手順としてまとめられたのが、(8)の関連性理論に基づく解釈手順 (relevance-theoretic comprehension procedure) である。

- (8) a. 認知効果を計算するのに処理コストが最小になるような道をたどり、接近可能な順序で解釈を吟味する。
- b. 関連性の期待が満たされたら（または満たされなければ）、そこで解釈を打ち切る。

ここで重要なのは、この手順は無意識的・自動的に、そして瞬時に機能し、発話の明示的意味・非明示的意味を解釈するための推論や、コンテキストの選択といった発話解釈のすべての側面に適用されるという点である。この手順に基づき (6a) の疑問についてオクシモロンの解釈を捉えるなら、言語的に記号化されたオクシモロンの意味から、聞き手は最適の関連性を求めて話し手が伝達しようと思図した「第三の意味」を推論しているということになる。なぜならオクシモロンの言語的意味には明らかな矛盾が含まれるため、聞き手にとって関連性のある解釈ではない可能性が高いからである。またこの推論プロセスが「無意識的・自動的に、そして瞬時に機能」するのであれば、言語的な意味では矛盾しているオクシモロンから、話し手の意図した意味を「いとも容易に理解してしまう」のも不思議ではないだろう。

それではオクシモロンを解釈する際に、聞き手が推論する「第三の意味」とはどのような性質のものだろうか (= (6b))。その点について検討する前に、発話によって話し手が伝達しようと思図した意味 (明示的・非明示的意味) が、関連性理論ではどのように捉えられているのか見ていくことにする。

3.2. 明意の解釈

関連性理論では、話し手が伝達しようと思図した明示的意味を明意 (explicature), 非明示的意味を暗意 (implicature) と呼んでいる。明意とは発話によって言語的に記号化された意味を推論によって発展させたもので、その「発展」には、一義化 (disambiguation), 飽和 (saturation), 自由拡充 (free enrichment), アドホック概念構築 (ad hoc concept construction) という4つの推論作業が含まれる。これらの推論は、その発話が生じたコンテキストにおいて少ない処理コストで十分な認知効果が得られるように進められる。つまり聞き手は (8) の解釈の手順に沿って関連性の期待を満たす解釈を求めていくのである。

まず一義化とは、「銀行」と「土手」という意味を持つ (9a) の bank のような曖昧な語について、話し手の意図した意味を選択することである。飽和には、(9a-c) の She や「彼」「彼女」がそれぞれ誰を指すのか指示対象を確定することに加え、(9b) で話し手が「何をするには若すぎる」と言っているのか、また (9c) では「彼女とどういった関係にある大学」なのかといった、発話で使用されている言語形式が要求する値をコンテキストから充填することが関わる。

- (9) a. *She went to the bank.* (→ *Jane Smith went to the financial bank.*)
 b. 彼は若すぎるよ。 (→ 佐藤一郎は【結婚するには】若すぎるよ。) (井門 2017: 111)
 c. 彼女の大学のレベルは高い。 (→ 田中花子の【通っている／教えている／運営している】大学のレベルは高い。) (井門 forthcoming)

一義化と飽和という2つの推論を通して発話から真偽判定可能な命題が得られることになるが、その解釈が聞き手にとって関連性のあるものではない場合もある。例えば (10a) の発話にある「あそこ」に「愛媛県松山市」と指示対象付与（飽和）を行っただけでは、話し手は明らかに偽であることしか明示的に言っていないことになる。なぜなら松山市にはお城以外にも見て回る場所はたくさんあるからだ。(10b) についても、北の島と南の島がどの島を指しているか指示対象付与することによって復元される命題は、「北の島 X と南の島 Y の間には距離がある」という自明の（＝関連性のない）ことしか述べていない。(10c) でも「あの授業」を「語用論の授業」と確定しただけでは、授業の予習するには（たとえ1分であっても）時間がかかるのは当然のことなので、話し手は分かり切った当たり前のことだけを明示的に伝えていることになってしまうのである。そうするとこういった解釈では聞き手にとって関連性があるとは言い難いだろう。そのため聞き手は、そのコンテキストで関連性のある解釈を求めてさらに推論しなくてはならないのである。そして例えば (10a) では「お城以外に見る価値のあるところはない」、(10b) では「あなたが思っているよりも距離がある」、(10c) では「語用論の授業の予習には他の授業と比べて時間がかかる」といった明意を復元するのである。

- (10) a. あそこはお城以外に見るところはないよ。(→ お城以外に見る【価値のある】ところはない。)
 b. The north island is some distance from the south island. (→ The north island X is some 【more】 distance 【than you think】 from the south island Y.)
 c. あの授業の予習には時間がかかる。(→ 【他の授業と比べて】時間がかかる。)
 (井門 2017: 111, 井門 forthcoming)

(10) の【 】に示した内容を補う推論プロセスを自由拡充と言う。飽和も自由拡充も (8) の手順に基づく推論によって何らかの要素をコンテキストから補うことであるが、飽和では真偽判定可能な命題を得るために言語表現が求める要素を補うのに対し、自由拡充は関連性のある解釈を得るためという語用論的な理由のみによって行われるというところに両者の違いがある。

さらに関連性理論では、明意を解釈する際にアドホック概念構築という語レベルでの推論が行われる場合があるということも指摘している。つまり語の解釈の際にも、聞き手は関連性の期待を満たすような解釈を求めて推論を行い、コンテキストに応じて記号化された概念を調整すると考えているのである。そういった語用論的にその場その場で構築される概念のことをアドホック概念と呼ぶ。アド

ホック概念構築は、記号化された概念を狭めて解釈する語彙的縮小 (lexical narrowing) と、緩めて解釈する語彙的拡張 (lexical broadening) に分類される。³

それでは語彙的縮小から検討していくことにしよう。次の (11) は、コンテキストに応じて記号化された語の概念が狭められ、より特定のな意味で解釈される例である。

- (11) a. I want to meet some *bachelors*. (Carston 2002: 324)
 b. 太郎は男だ。 (井門 2017: 112)

例えば (11a) が結婚を考えている女性の発話だとすれば、「誰でもいいから独身の男性に会いたい」ということではなく、「結婚相手としてふさわしい独身の男性に会いたい」と話し手は言っているのだと聞き手は理解するだろう。つまり、*bachelor* という語が記号化する「独身の男性」の意味を、コンテキストに合わせて「結婚に適した年齢で、話し手の好みに合うような独身の男性」といった意味にまで狭めて解釈するのである。なぜならその狭められたアドホック概念 **BACHELOR*** を含む明意が、例えば聞き手の持っている「話し手は結婚したがっているようだ」という想定を強化したり、「話し手は **BACHELOR*** の特性を備えた人を紹介してほしいと思っている」といったコンテキスト的含意を導くことで、関連性のある解釈となるからである。また (11b) にある「男」という語を記号化された意味のまま解釈すると、話し手は「太郎は男性である」という分かり切ったことしか言っていないことになってしまう。そういった自明な解釈では関連性があるとは言えないだろう。そのため聞き手は関連性のある解釈を求め、コンテキストに応じてある特定の性質を持つ [男]* に狭めて解釈することになる。その結果、「太郎は決断力のある男／勇気のある男だ」といった明意が復元されるのである。

概念が狭められる例とは対照的に、コンテキストに応じて記号化された概念が緩められ、より広い意味で解釈される場合もある。以下の例を見てみよう。

- (12) a. 前橋は東京から北西に 100 キロだよ。 (井門 2017: 114)
 b. I am *starving*. (Allott 2010: 88)

例えば (12a) が地図を見ながら東京から前橋へ車で行く計画を立てている場面での発話だとしよう。そういったコンテキストでは、「北西」という方角を表す語や「100 キロ」という数値が、正確に北西の方角に、ちょうど 100 キロの地点と言っているのではなく、おおよその方角と距離を表していると理解されるだろう。次の (12b) の発話は、もちろん本当に飢え死にする人が言うこともありえる。しかし餓死するほどではないが、それに近い状態の人が言っているのであれば、記号化された *starving*

³ 記号化された概念と区別するために、アドホック概念は、英語表記の場合 **CONCEPT***、**CONCEPT**** のように概念を大文字にして右肩にアスタリスクをつけ、日本語の例では [概念]*、[概念]** という表記を使用する。アスタリスクの数の違いは異なったアドホック概念であるということを示す。

の概念を少しだけ拡張した概略表現の STARVING* として解釈されるだろう。または、ちょっとお腹がすいた程度の状態を大げさに言っているだけなら、さらに拡張された STARVING** が復元される。そうするとこの発話は、コンテキストによって、文字通りの意味、概略表現、誇張法 (hyperbole) のいずれにも解釈できるということになる。

ここまで語彙概念が縮小される場合と拡張される場合を別々に見てきたが、次のメタファー (metaphor) の例のように、1つの語彙概念に対して両者が同時に適用されることもある。

(13) 三郎は王様だからなあ。

(井門 2017: 116)

この発話が、あるサッカーチームの中心選手として、自己中心的なプレーをする三郎を批判してなされたものだとしよう。その場合、実際には王様でない三郎に対して「王様」という語が比喩的に用いられているので、聞き手は「国王」や「君主」といったその文字通りの意味を緩めて解釈するだろう。それに加え、この例では概念の狭めも同時に行われていると考えられる。なぜなら、王様の中には権力を持たない象徴的な存在の王様や、国民のことを思って尽力してくれる心優しい王様もいるが、このコンテキストではそういった意味で三郎のことを「王様」に喩えているわけではないからだ。そうすると、王様が持つ特性の中でも特に「絶対的な権力を持つ」や、「自分のやりたいように権力を行使する」といったものに狭められていると言えるだろう。つまり「王様」の概念の絞り込みを行いながら、文字通り「王様」ではない人も含むようにその概念を拡張することによって、「チーム内で絶対的な権力を持つ選手」や、「自分のやりたいようにプレーする選手」といった意味を表す [王様]* が形成されるのである。この例が示すように、メタファー解釈の際には、1つの語彙概念に対して狭めと緩めの両方が適用されることになる。そうして構築されたアドホック概念を含む明意の解釈と並行して、「試合中は三郎の指示通りに動かなくてはならない」や、「三郎のやり方には口を出せない」といった非明示的意味も引き出されるのである。

さらにトートロジー (tautology) についてもアドホック概念を援用した分析が行われている。次の例を見てみよう。

(14) (Mary finds a penny on the street and picks it up.)

Tom: Why did you pick it up? It's just a penny.

Mary: *Money is money.*

(西川 2003: 54)

「AはAだ」というトートロジーを文字通りに解釈すれば自明のことしか言っていないことになるが、西川 (2003) はその解釈について、1つ目のAは「Aというものは」のように総称的に理解され、2つ目のAに対してアドホック概念が形成されるとしている。つまり A is A* という明意が復元されるとするのである。例えば (14) の括弧内に示したコンテキストに基づいて、2つ目の money に対して「(量

の大小にかかわらず) 価値のあるもの, 大切なもの」という意味の MONEY* を形成し, 「お金というものは, (量の大小にかかわらず) 価値のあるもの, 大切なものである」という明意を復元するのである。そういったアドホック概念を含んだ明意と相互調整することによって, 「たとえ小銭であっても粗末にしてはいけない」といった非明示的な解釈も導かれるだろう。

3.3. 暗意の解釈

関連性理論では発話の非明示的意味である暗意について, 「話し手が伝えようと意図した意味のうち, 明意以外のもの」と定義している。それでは次の例で太郎は何を非明示的に伝達しようとしているのか考えてみよう。

(15) a. 花子: 今晚, 飲み会があるけど来ない?

b. 太郎: 俺, 明日テストがあるんだよ。 (井門 forthcoming)

(15b) で太郎は, 飲み会に参加するともしないとも言っていない。しかしこの発話を聞いた花子はすぐに (16) のように推論し, 太郎はテスト勉強をするため飲み会に参加しないと理解するだろう。つまり, (15b) から復元される明意 (16a) とテストに関してすぐに思いつくような想定 (16b) を前提に, 結論として (16c) を引き出したのである。

(16) a. 太郎 (=俺) は, 8月9日 (=明日) にテストがある。

b. テストの前日は勉強をするため飲み会に参加しない。

c. ∴ 太郎は今晚の飲み会に参加しない。 (井門 forthcoming)

太郎は (15b) の返答で言葉にはしていないが, (16c) だけでなく, 参加できない理由 (16b) も花子に伝えようと意図しているだろう。このことから関連性理論では両者とも (15b) の暗意と捉え, (16b) を暗意された前提 (implicated premise), (16c) を暗意された結論 (implicated conclusion) と呼ぶ。3.2 節で見た通り, 明意は言語的に記号化された意味を推論によって発展させたものであるが, この例が示すように, 暗意は推論のみによって得られるところに明意との違いがある。

4. 関連性理論から見たオクシモロン

それではこれまで見てきた関連性理論の枠組みからオクシモロンの解釈がどのように説明できるのか, (6b, c) の疑問について検討していくことにする。まず明意と暗意のどちらに重きを置いてオクシモロンの解釈にアプローチすべきか, 以下の「小さな巨人」という例を通して考えてみよう。

(17) a. 1964年東京五輪の日本の金メダリスト第1号だ。身長155センチ。重量挙げで次々とバーベ

ルを挙げた「小さな巨人」の活躍に高度経済成長まっただ中の列島が沸いた。

(『朝日新聞』2017年10月25日)

- b. 70年にはUS スチールを抜いて当時の1位になった新日鉄だが、今回の合併で2位になるとはいえ、世界の粗鋼生産量の3%を握るだけの「小さな巨人」だ。今や中国の粗鋼生産量は世界の4割。
(『朝日新聞』2012年10月1日)

(17a) は東京五輪の金メダリスト三宅義信氏について述べたもので、この例での「小さな巨人」は、「体格は小さいが優れた能力を持つ人」と解釈できる。一方 (17b) は新日本製鉄と住友金属の合併に関する記事からのものであるが、こちらは「生産量は小さいが規模の大きな企業」といった意味になるだろう。つまり「小さい」は「体格／生産量が小さい」という意味で、「巨人」は比喩的に「優れた能力を持つ人／規模の大きな企業」と解釈されるのである。これらの解釈は、いずれも「小さな巨人」という元の表現の言語形式を保持しつつ、その意味を発展させたものと捉えることができる。言い換えれば、3.2節で見た明意の定義にある、「発話によって言語的に記号化された意味を推論によって発展させたもの」とみなすことができるのである。このことから、以下では明意の観点からオクシモロンの解釈を検討していくことにする。

4.1. アドホック概念構築とオクシモロン

それではオクシモロンの記号化された意味を明意へと発展させる際に、どのような内容を聞き手は推論するのだろうか。3.2節で見た通り、明意を復元するための発展には、一義化、飽和、自由拡充、アドホック概念構築の4つが含まれるわけだが、これらのうち、まずアドホック概念構築の観点からオクシモロンの解釈について検討していくことにしよう。アドホック概念構築を援用するのは、第2章で見たように佐藤(1987)や、野内(2005)などで、語の意味の弾性や伸縮性がオクシモロンの解釈に関わると主張されているからである。関連性理論の観点からそういった語の意味の弾性や伸縮性を捉え直せば、コンテキストに応じてアドホック概念が構築されていると考えられるのである。

次の(18)はアドホック概念構築を説明する際にしばしば引用される例である。

(18) Kato (of O. J. Simpson): He was upset but he wasn't upset. (Carston 2002: 324)

(18) は殺人事件で逮捕された O. J. Simpson の裁判で証人に立った Kato 氏による発話である。これを文字通りに解釈すれば、「彼は動揺していたが、動揺していなかった」という矛盾したものとなる。それにもかかわらず、この発話から話し手の意図した意味が把握できるのは、Carston (2002) によれば、以下のように聞き手が2つの upset という語によって記号化された「(一般的な) 動揺した状態」という意味をそれぞれ縮小し、別々のアドホック概念を構築して解釈するからだとしている。

- (19) This utterance looks contradictory on the surface, but, in the context of a witness being questioned about Simpson's state of mind on the day when his wife was murdered, it was understood as communicating that he was in a certain kind of upset state of mind, but he was not in another (more intense, perhaps murderous) mental state. The word 'upset' was understood as expressing two different concepts of upsetness, at least one, but more likely both, involving a pragmatic strengthening of more general lexical concept UPSET.

(Carston 2002: 324)

つまり (20) に示すように、upset が記号化する一般的で広い概念を、コンテキストに基づいて特定のな状態へ絞り込んで、「取り乱した状態」という意味のアドホック概念 UPSET* と、「人を殺しかねないほどに取り乱した状態」という意味のアドホック概念 UPSET** を構築しているとするのである。

- (20) He was UPSET* but he wasn't UPSET**.

(彼は取り乱してはいたが、人を殺しかねないほどに取り乱した状態ではなかった。)

Carston (2002) はこの例をオクシモロンとして分析している訳ではない。しかしこの例を「動揺していたが、動揺していなかった」という矛盾関係を含んだオクシモロンとみなすことができるため、アドホック概念に基づいた説明がオクシモロン全般に適用できるのか検討する必要があるだろう。

アドホック概念を援用するもう 1 つの理由として、以下の森 (2002) にあるように、トートロジーやメタファーがオクシモロンと密接な関係にあるという点が挙げられる。

- (21) a. トートロジーの裏返しとしてのオクシモロン「大学じゃない大学」「公然の秘密」
 b. 両方またはどちらか一方の語が比喩的な拡張をしているがために矛盾が解消されているもの
 「冷たい炎」「若年寄」
 c. 同じ事態を違った視点からみており、そのおのおのが別個にカテゴリーをかぶせているために、矛盾がそもそも生じていないもの「遠くて近い (仲)」「慇懃無礼」 (森 2002: 118-119)

オクシモロンとトートロジーとの関係については、同様の指摘が佐藤 (1987) にも見られる。

- (22) 伝統的なレトリックの理論では、この《同義循環》と《逆説》とは、まったく別の表現形式としてたがいに無関係にとりあつかわれていたが、仔細に点検してみれば、相互にまるであべこべであるからこそ、またきわめて縁の深い形式であることが判明するはずである。要するに、《対義結合》のひとつの項を逆転してしまえばそっくりそのまま《同義循環》になるのだ。

(佐藤 1987: 226)

つまり、「AはAである」というトートロジー（(22)の引用では「同義循環」）を裏返しにすれば、「AはAでない」というオクシモロン（対義結合）になるということである。

これらの主張と上で見た西川（2003）のトートロジーの分析を踏まえると、アドホック概念の観点から両者の明意は、大まかに示せば以下のような形を取るということになる。

- (23) a. トートロジー：AはAだ → Aは[A]*だ
 b. オクシモロン：AはAでない → [A]*はAでない

(23b) のような考え方に基づいて箭田（2015）⁴ はオクシモロンの解釈を分析し、記号化された意味に見られる矛盾が、アドホック概念を構築することで解消されると主張している。次の例を見てみよう。

(24) a. まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何とも知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられて来る。どだい、それは、笑顔でない。この子は、少しも笑ってはいないのだ。その証拠には、この子は、両方のこぶしを固く握って立っている。人間は、こぶしを固く握りながら笑えるものでは無いのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、顔に醜い皺しわを寄せているだけなのである。（太宰治『人間失格』（箭田 2015: 25））

- b. [笑顔]*は笑顔でない。（箭田 2015: 25）

(24a) では「笑顔は笑顔だ」というトートロジーの裏返しとしてのオクシモロン「それ（＝笑顔）は笑顔でない」が用いられている。(23b)の形式を適用すれば、1つ目の「笑顔」に対して「顔に皺を寄せているだけの表情」といった意味のアドホック概念が形成され、2つ目の「笑顔」は文字通りに解釈されることになる。それによって「顔に皺を寄せているだけの表情（＝[笑顔]*）は笑顔でない」といった明意が復元され、言語的な意味での矛盾が解消されるのである。

それでは(21b)にある比喩的な解釈が関わるオクシモロンについて、(17)で挙げた「小さな巨人」というオクシモロンで検討してみよう。上でも見たように、このオクシモロンの「巨人」という語は比喩的な意味で用いられている。その解釈をアドホック概念構築の観点で捉えると、(13)のメタファーの例で示したように、記号化された「巨人」という語から、それぞれのコンテキストに応じて「優れた能力を持つ人」という意味のアドホック概念 [巨人]* や、「規模の大きな企業」という意味のアドホック概念 [巨人]** を構築して解釈すると考えられる。さらに箭田（2015: 37-38）は、「巨人」に対してだけでなく、「小さな」にもアドホック概念が形成されるとしている。例えば(17a)の「小さな」では、その概念が狭められて「体が小さい」といった意味のアドホック概念が形成され、その結果として [小さな]* [巨人]* のように解釈すると考えるのである。

⁴ 以下で見ていくように、箭田（2015）ではアドホック概念が構築されるのはオクシモロンで用いられた1つ目の語だけでなく様々な組み合わせが検討されている。

4.2. 段階的な形容詞が用いられたオクシモロン

以上のように箭田 (2015) では、解釈の際にオクシモロンを構成する 2 語、または片方の語にアドホック概念が構築されるとしている。しかし、すべてのオクシモロンの解釈にアドホック概念構築が関わっているかどうかについては、さらに検討する余地があるようにも思える。その点について次の例で考えてみよう。

- (25) a. 2013 年度の定期券を使わない乗客数のうち、小児は 4 年前に比べて約 2% 減。電車内で子どもが騒いだら困ると、車で移動する親が増えたという。「鉄道は子どもに人気が高いが、近くて遠い交通機関になりつつある」と危機感を募らせる。

(『朝日新聞』2014 年 8 月 7 日 (井門 2017: 120))

- b. 両国の長い間の歴史的背景や人々の思いにより、「近くて遠い国」と言われ続けたが「ヨン様」「少女時代」「新大久保」と、このごろ一般的にも「近くて近い国」と皆が感じつつあっただけに、今後が大いに気懸かりだ。

(<http://nakasone-family.blog.so-net.ne.jp/2012-08-18> (井門 2017: 120))

- (26) a. 1964 年東京五輪の日本の金メダリスト第 1 号だ。身長 155 センチ。重量挙げで次々とバーベルを挙げた「小さな巨人」の活躍に高度経済成長まっただ中の列島が沸いた。(=(17a))
- b. 70 年には US スチールを抜いて当時の 1 位になった新日鉄だが、今回の合併で 2 位になるとはいえ、世界の粗鋼生産量の 3% を握るだけの「小さな巨人」だ。今や中国の粗鋼生産量は世界の 4 割。(=(17b))

箭田 (2015) に基づいた「小さな巨人」の解釈については上で見た通りだが、まずそのアドホック概念による説明を (25) の「近くて遠い」というオクシモロンにも適用してみよう。(25a) は、最近の鉄道ブームにもかかわらず、日常生活で鉄道を利用する子どもの数が減っていることに鉄道会社が危機感を募らせているという記事からのものである。そういったコンテキストでの「近くて遠い」という表現を解釈する際には、「近い」の文字通りの意味から、「身近に感じられる」といった意味に拡張された [近い]* が構築されることになる。「遠い」についても、「あまり利用しない」といった意味の [遠い]* として解釈されるだろう。そしてこの「近くて遠い」は、「身近に感じられるが、あまり利用しない交通機関」という意味だと理解されるのである。日本と韓国の関係について述べた (25b) でも同じく「近くて遠い」という表現が用いられているが、(25a) とは異なった意味で解釈されるだろう。(25b) の「近くて遠い」という表現での「近い」は、文字通り「距離的に近い」ということを伝えている。一方「遠い」に関しては、「距離的に遠い」という「遠い」の文字通りの意味を拡張して、「親近感が湧かない」といった意味として (25a) とは異なった [遠い]** が構築されることになる。そしてそれら 2 つを結びつけて、「距離的に近いが、親近感が湧かない国」という解釈が得られるのである。つまり

箭田 (2015) の主張に則れば, (25, 26) の解釈にはそれぞれ以下のようなアドホック概念を含んだ明意が関わることになる。

(27) a. [近く]* て [遠い]* 交通機関 (= (25a))

b. 近くて [遠い]** 国 (= (25b))

(28) a. [小さな]* [巨人]* (= (26a))

b. [小さな]** [巨人]** (= (26b))

第2章で瀬戸 (1988: 48-49) の記述に基づき, 品詞の観点からオクシモロンで用いられた語の結合には (2a-d) の4つのタイプがあることを示したが, (25) の「近くて遠い」は (2c) の「形容詞どうしの結合」に該当するオクシモロンで, (26) の「小さな巨人」は (2a) の「名詞に形容詞がかぶさったもの」に当てはまる。これらの例で用いられている「近い」「遠い」「小さい」という形容詞自体に注目すると, それらはいずれも段階的な形容詞であり, 「何と比べて近い/遠い/小さい」のかはコンテキストによって異なってくる。言い換えれば, 「何と比べて」という解釈についても聞き手はコンテキストに基づいて推論する必要があるのだ。そこで, その部分の解釈にも箭田 (2015) で主張されているようにアドホック概念が構築されていると捉えるべきか, またはそれ以外の推論プロセスが働いているのか検討してみたいと思う。

まず (25a) の「近くて遠い」では, 「近い」も「遠い」も文字通りの意味を拡張した比喩的な意味で用いられているため, 箭田 (2015) の分析の通りアドホック概念のみに基づいて解釈されるとして問題ないだろう。(25b) の「遠い」や (26a, b) の「巨人」についても同様である。その一方, (25b) と (26a, b) の「近い/小さい」では, それぞれのコンテキストで話し手が「何と比べて近い/小さい」と言っているのかは, その形容詞を縮小したアドホック概念として解釈されるのではなく, 以下の【 】内に示すような内容が推論によって補われているという可能性も考えられる。

(29) a. [近く]* て [遠い]* 交通機関 (= (25a))

b. 【他の国と比べると】近くて [遠い]** 国 (= (25b))

(30) a. 【オリンピック選手としては】小さな [巨人]* (= (26a))

b. 【海外の製鉄会社と比べると】小さな [巨人]** (= (26b))

これらの違いは, 用いられた形容詞が比喩的な意味で解釈されるか, 文字通りの意味として解釈されるかによるだろう。つまり文字通りの意味で用いられている場合, その意味に対して聞き手は「何と比べて」という部分をコンテキストから補うことになるのである。

それではどのような推論プロセスを通してこういった内容が補われるのだろうか。可能性として考えられるのは飽和か自由拡充であるが, それぞれについて次の例で検討してみよう。

- (31) a. (地図を見ながら) ここから大学は近い。(→ X 駅から Y 大学は【Z 公園に比べて】近い。)
 b. あの授業の予習には時間がかかる。(→ 【他の授業と比べて】時間がかかる。) (= (10c))

(31a) の「ここ」と「大学」に指示対象付与を行い、「X 駅から Y 大学は近い」という内容が得られたとしても、例えば「Z 公園に比べて」といったように「何と比べて近い」と言っているのが確定されなければ、この発話の真偽は問えない。そうするとこの部分の推論は言わば義務的なものであり、「何と比べて」という解釈には、真偽判定可能な命題を得るための推論である飽和が関わっているということになる。同様のことが「小さい」にも言えるだろう。このことから、(29b) や (30a, b) の段階的な形容詞「近い／小さい」に対する「何と比べて」という解釈も、飽和によるものと考えるのが適当なように思われる。それでは自由拡充についてはどうだろうか。(31b) の「他の授業と比べて」という解釈は、3.2 節で見たように自由拡充によって補われる。そうすると、それと同じような内容が補われる (29b) や (30a, b) での解釈にも自由拡充が関わっているように思えるかもしれない。しかし (31b) と (29b) や (30a, b) とでは、そもそも【 】内の部分を推論する理由が異なるため、これらの解釈を同列に論じるべきではないだろう。

こういったアドホック概念構築以外の推論プロセスが働いているかどうかについては議論が不十分であり、さらに検討が必要であるが、段階的な形容詞が含まれる一部のオクシモロンについては、(29b) や (30a, b) で示したように飽和に関わる可能性がある。そうすると、先行研究で述べられているオクシモロンで用いられた語の「意味の弾性」は、アドホック概念構築だけでなく、記号化された語の意味に何らかの要素が補われる飽和というプロセスに関しても当てはまるだろう。ただしオクシモロンの解釈にいずれのプロセスが適用されるにせよ、関連性のある解釈を求めて聞き手が推論を行い、記号化された意味では矛盾するオクシモロンから、話し手の意図した意味である明意を復元しているということに変わりはないのである。

5. おわりに

本論文ではオクシモロンの解釈について、(6a-c) で挙げた疑問を中心に関連性理論の枠組みから検討してきた。まず (6a) の「オクシモロンが容易に理解される解釈プロセス」については、通常の話話解釈と同様に、(8) の関連性理論に基づく解釈手順に沿って関連性のある解釈を求めて推論が行われていると考えられる。つまり聞き手は、最適の関連性を求めて話し手が伝達しようと意図したオクシモロンの「第三の意味」を、無意識的・自動的に、そして瞬時に推論しているのである。その結果導かれるオクシモロンの解釈は、記号化された意味を推論によって「発展」させた明意と捉えることができる (= (6b))。その「発展」がそれぞれのコンテキストで (8) の手順に則って自動的に行われていることを、先行研究では「意味の弾性」と呼んでいるのである。ただしその「意味の弾性」には、アドホック概念構築を通してオクシモロンで用いられた語自体が「発展」する場合と、飽和によって

その語に何らかの要素が補われて「発展」する場合の2つが考えられるだろう (= (6c))。

最後に今後の課題として、(6d) で挙げた「すでに慣用化している *dead oxymoron* の解釈」については、本稿で検討してきたような明意解釈のための推論プロセスに基づいた分析が可能か、またはすでに定着しているため、記号化された意味として捉えるべきかなど検討が必要だろう。その際には、井門 (2012) や岡田・井門 (2014) で明らかにした、定着したイディオムの解釈に関する研究成果も踏まえて分析を行いたいと考えている。また本稿ではオクシモロンと密接な関係にある逆説法については特に区別をしてこなかったが、第2章でも示した通り野内 (2002: 105) によると、逆説法は「語と語という小さな単位ではなく、文を越える大きな単位が問題になる」ことから、逆説法についても本稿で検討したような語レベルでの分析が可能か、または文レベルで推論が働いているのか検討したい。さらに、オクシモロンが伝える意味を別の言葉を用いて言い換えた場合には失われてしまうような修辭的な効果についても、関連性理論で提案されている明意・暗意の強弱、認知効果と処理コストといった観点から分析したいと考えている。

引用文献

- Allott, Nicholas (2010) *Key Terms in Pragmatics*, London: Continuum. (今井 邦彦 (監訳) 岡田 聡宏・井門 亮・松崎 由貴・古牧 久典 (訳) (2014) 『語用論キーターム事典』東京: 開拓社.)
- Arii, Matsuo (1990) "Rhetoric as Resistance: Oxymoron and Hypallage," 筧壽雄教授還暦記念論集編集委員会 (編) 『ことばの饗宴』 631-648, 東京: くろしお出版.
- Carston, Robyn (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Oxford: Blackwell. (内田 聖二・西山 佑司・武内 道子・山崎 英一・松井 智子 (訳) (2008) 『思考と発話: 明示的伝達の語用論』東京: 研究社.)
- 井門 亮 (2012) 「イディオム解釈とアドホック概念」『言語・文化・社会』10, 1-15.
- 井門 亮 (2017) 「多義語の分析と語用論」中野 弘三 (編) 『語はなぜ多義になるのか: コンテキストの作用を考える』106-127, 東京: 朝倉書店.
- 井門 亮 (forthcoming) 「関連性理論」加藤 重広・澤田 淳 (編) 『はじめての語用論』東京: 研究社.
- 今井 邦彦 (2015) 『言語理論としての語用論: 入門から総論まで』東京: 開拓社.
- Leech, Geoffrey N. (1969) *A Linguistic Guide to English Poetry*, London: Longman.
- 森 雄一 (2002) 「オクシモロン管見」『成蹊國文』35, 114-126.
- 西川 眞由美 (2003) 「Tautology の考察: ad hoc 概念の視点から」『語用論研究』5, 45-58.
- 野内 良三 (2002) 『レトリック入門: 修辭と論証』東京: 世界思想社.
- 野内 良三 (2005) 『日本語修辭辞典』東京: 国書刊行会.
- 岡田 聡宏・井門 亮 (2014) 「省略語・イディオム解釈とアドホック概念」『言語・文化・社会』12, 1-29.
- 大森 文子 (1994) 「オクシモロンについての一考察」『言語文化研究』20, 65-85.
- 佐々木 賢一・他 (監) (2006) 『レトリック事典』東京: 大修館書店.
- 佐藤 信夫 (1987) 『レトリックの消息』東京: 白水社.
- 瀬戸 賢一 (1988) 『レトリックの知』東京: 新曜社.
- 瀬戸 賢一 (1997) 『認識のレトリック』東京: 海鳴社.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986/1995²) *Relevance: Communication and Cognition*, Second Edition, Oxford: Blackwell. (内田 聖二・中遠 俊明・宋 南先・田中 圭子 (訳) (1999) 『関連性理論: 伝達と認知』東京: 研究社.)
- 箭田 千代里 (2015) 『関連性理論に基づいたオクシモロンの分析』群馬大学社会情報学部卒業論文.